

## 第2節 防災関係者の地震体験談

### 体験談 1

陸上自衛隊第八普通科連隊 勤務 男性

#### ●初動

私は午前中、鳥取市の千代川の河川敷で中国管区警察局の地震を想定した人命救助訓練に出席しておりました。その後、車で米子に帰ってみると部隊で騒いでおり、初動派遣部隊はすぐ出動できるように車の準備をしているという状況でした。そして、緊急時は思った以上に情報が不十分なので自分で確かめる必要がある為、偵察部隊を出し、県の主要な所に連絡幹部を出しました。

県の防災監から派遣要請の電話があり、最初に給水の要請が来たので偵察部隊を出しました。次に、ここにはヘリコプターは持っていませんから部隊にすぐ報告し、航空偵察を行い周囲の被害状況の把握・確認に努めました。夕方になり、境港より給水の要請が来た為、北富士の演習場に訓練に行っている部隊に連絡し、「鳥取に至急帰るように」と指示をしました。部隊は夜を徹して走り、1回豊岡で仮眠し、あくる日に到着したという状況です。

#### ●従事した防災対策

給水は給水トレーラー6台で6トン2回位行いました。その後、今度は日野町で水が出ない、炊き出しをしないとイケないという話になり、炊き出しを行いました。

震災後、電話は通じたと思いますが防災無線等は大変混雑していました。市町村の中の被害状況を処置して整理するという機能はおよそありません。防災担当と関係者が一体となってひとつの頭でやっているかというところでもありません。ですから、我々が現場に行っても誰と調整すれば話が分かるのか、誰に聞けば正しい情報が入るのか読めないという事が結構あります。

情報は、ただ伝えれば良いというわけではありません。情報は直ちに対策に活かすためのものです。システム化していないと、情報の断片資料がいくらあってもダメです。各市町村の被害状況等のデータをパソコンで収集してみましたが、我々に伝わるのは整理されていない生の情報がストレートに入ってくるだけでした。本当は生の情報を1回処理する機能が必要だと思います。そうでないと、誤った情報に惑わされ、大変な事になってしまいます。手を打ち過ぎて困る事はありません。対応できなかったという事が一番怖いのです。初動時には、正しい情報の入手が大切なのではないかと思います。

偵察時に被害の話は聞きますが、給水が必要なかどうかという事は、自衛隊ではつかめません。基本的には、水が必要だから自衛隊が出動するというものではありません。色々ある手段のうちの1つとして自衛隊も水を運んでくれという事です。ただこれまでの教訓から、私達はおおよそその行動パターンの予想はつきます。1番最優先は人命救助、それに並行して水や第1・2次的な応急生活支援というのがまず必要になるでしょう。実際の所、防災対策も、殆ど初動で読めますが、後は予想外の事があるかないかという話です。

### 教訓 伝えたいこと

- 地震の際には道路が寸断されて、現場なり目的地へ行くことができないということを身をもって体験した。
- マニュアルも重要だが、マニュアルにとらわれない現場での適切な判断力。
- 地震発生における道路構造上の被災箇所（点検を特に行うべき所）の選定。
- やっぱり人間はすばらしい。ボランティアなどに行ける技術を身につけておきたい。
- 人間未経験な事柄に出会うと、正常な判断ができなくなる等、予備知識の必要性を強く感じました。
- 今後、地震が起きた時、どういう対応が必要なのか、それ

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

災害時は色々な話が乱れ飛びます。そういうのが堂々とまかり通り、どこに確認する事も出来ません。混乱時ですので、やむを得ないという事もあります。やはり組織化する必要があります。それぞれの機関で最大限の努力をしなければいけません。やはり、市町村が県と上手くコンタクトが取れるように日頃から行っておく必要があるのではないかと思います。

この度の災害時も報道関係者が駐車していた為に、救援活動に非常に邪魔になりました。結局、報道関係者に同じ事を何度も聞かれるので、その分の対応がロスタイムになります。気持ちは分かりますが、こちらの方の気持ちも分かって欲しいと思いました。町の災害対策本部の中に広報のセクションを設置し、一元化してコントロールすれば良かったのではないのでしょうか。

## 体験談 2

鳥取県立根雨高等学校 勤務 男性

### ● 初 動

教務室の机で校務中で、今までにない大きな地震だと感じ、このまま潰されるのかと一瞬思った。あわてないように心がけて様子を見た。とても揺れが長く続いたと感じた。窓際にある校舎全体を囲んだ工事用足場とフェンスが倒壊するのではと心配した。

地震がおさまるのを見て、他の職員の所在と安全を確認し合いながら2階から1階に下り玄関から外に避難した。事務職員と数名の居残り職員で遠足からゴールしている生徒約40名を放送で見回りでグラウンドへ避難・誘導する。事務室で電話の対応をするが、余震がくるたびに外へ飛び出す。校内電話の受話器がはずれて「ピーピー」鳴っており、各部屋を回って受話器をかけなおす。どの部屋も足の踏み場もない散乱状態。保護者、県教委等からひっきりなしに電話問い合わせや状況報告の要請あり。電話がつながりにくく公衆電話とファックスでなんとか対応する。

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

今回遠足で生徒は校内にはほとんどいなかったのが比較的落ち着いて行動できたと思うが、外の生徒の状況がつかめず心配した。また校内に生徒がいた場合の授業や調理実習、化学実験等様々な場面を想定したシミュレーションをしておくことが肝要と感じた。理科室の薬品類、薬品庫、標本等の地震対策が必要。避難経路の壁掛けや黒板やロッカーなど落下転倒による通路妨げになるものの対策が必要と感じた。

電話はつながりにくくなる。断水になりトイレが使えなくなる。道路やJRが至る所で不通となり生徒の下校ができなくなった。情報の把握が思うようにできず、テレビや防災無線で流れる地震情報が情報源であった。とにかく個々の状況把握に時間がかかった。生徒に持ち込み禁止にしていた携帯電話が家庭連絡に役立っていた。

今回地震発生の時間帯も昼間の交通量の少ない午後1時30分であったことが幸いしたと思う。大きなケガ人がなかったのは奇跡と言ってよい。夜間、冬季の雪、雨、火災などの条件が重なったらどうなるのかシミュレーションの必要を感じる。また生徒は、地面の激しい揺れ、建物の崩壊、山崩れ、自宅の被災など

その立場で真剣なシミュレーションと避難訓練、心の備えが必要だと思った。

- 災害対策活動の役割が決められているが、仕事の場所によっては果たせないことがあると改めて認識した。
- 一瞬茫然としてしまったことを反省し、とっさに対応し得る気構えを常に備えておきたい。

● ボランティアの活用・方法を常日頃から考えておく必要がある。

- 地震対応の良い教訓となりました。緊急時、マニュアルは必要だが全てはマニュアル通りにはいかない。あらゆる場合に対応できる能力を養うことが重要と思いました。

今までにない体験と情景を目の当たりにしたため相当なショックを受け、心のケアの必要な生徒がかなり出て不登校の原因にもなった。今回の地震体験を十分に生かしたハード面、ソフト面の対策、特に子供やお年寄り、病弱な人への心の地震対策の重要性を感じた。

## 体験談 3

鳥取県警察本部 勤務 男性

### ●初 動

鳥取市の千代川河川敷で開催された中国管区広域緊急援助隊等合同訓練が終了した直後で、訓練会場の後片付けを行っていたときに地震が発生した。防災対策を主管とする災害担当者として早急に災害警備本部の設置と各組織との連絡体制をとれる本部の設置にあたった。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

災害警備本部の設置、運営等に従事したが、被害調査を集計するに当たり、県や市町村との連絡体制が統一したものでなく、正確な被害集計に予想以上の手間と時間を要し、普段考えていた情報の収集が容易にできなかった。

この問題は、県では避難住民について避難勧告の世帯、住民数のみ集計されていたが、現実には自主避難している住民が相当数あったため避難実態を正確に把握できなかったことにある。これを解決するには、自治会等の防災組織と密接な連絡が取れるような体制の整備を行い、自主避難状況を把握できる避難対策を充実することが必要と考えられる。

## 体験談 4

鳥取県県民局 勤務 男性

### ●初 動

地震が発生した場合には、特に初動体制が重要だといわれる。今回の鳥取県西部地震の場合には、災害対策本部西部支部が直ちに設置され、応急対応にあたることができた。その要因としては、第1に地震発生が平日の勤務時間内であったこと、第2に災害図上訓練が7月に実施され、職員が迅速に対応できたこと、第3に当日米子コンベンションセンターで開催されていた介護保険サミットに県庁から参加していた職員の応援が得られたことなどがあげられる。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

ただし、地震発生が休日あるいは夜間であった場合や県庁から介護保険サミットに参加していた職員の応援がなかった場合には、迅速に災害対策本部西部支部が設置されたかどうか疑問である。緊急連絡網の

- 消防署などは、こういう時全職員が何日も泊り込むことになるので、こういうことを考え、庁舎などの施設、食糧の確保を考えて欲しい。
- 各自治体（自主防災組織含む）の災害対処、危機管理について抜本的に見直し再構築が必要と思う。
- 庁舎施設における防災マニュアルの再点検、充実化の必要

- 性を改めて認識した。（既存のマニュアルもあるが、より平易な担当外の者でも使用できるものに改める必要を痛感）
- 各住民に対して地区の避難場所の徹底と速やかな情報の伝達。地域防災計画の勉強不足。
- ここの防災機関の能力を最大限に発揮し、それらの結集により大規模災害に対応する為、災害情報の伝達網を今より

検証や災害用電話、FAX等の機器設置方法等の周知徹底が必要である。また、組織改正により新しく設置された県民局の防災計画上の位置づけ等を明確にしておくことも必要である。

災害対策本部西部支部で県及び市町村の災害対策本部との連絡及び被害情報等の収集業務にあたった。24時間体制をとる中で、職員が交代する場合には正確な情報の伝達・引継が必要である。関係資料・書類のファイリングや引継メモによる情報の共有化や県職員が市町村の災害対策本部に応援のため派遣されたことによる連絡先の一本化及び情報の一元化が図られたことも効果的であった。

災害発生の場合には、被害状況の把握は非常に重要である。しかし、県から縦割りで市町村に資料の提出が求められたため、市町村にはかなりの負担であったようである。可能であれば、窓口の一元化を図り、最前線で現場対応に追われる市町村の負担をもう少し軽減すべきである。

今回の地震を体験し、日頃、県単独ではなく、市町村や関係機関が一体となり訓練を実施することの重要性を痛感した。

## 体験談 5

鳥取県市町村振興課 勤務 男性

### ●初 動

部長の指示により、私が溝口町へ行ったのは10月11日。震災が発生して5日目で職員にかなり疲れが溜まっていて、地震後、職員は昼夜を問わず全然休んでいないのを知り、「とにかく休ませよう」ということで職員を夜は3分の1まで削りなさいと指示。それが最初にやった指導です。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

都市型地震とは違い、年寄りの方は壊れた家を直す資金力がないと言って家のそばに居たいのです。仮設住宅が非常に馴染まないのです。もう1つはビニールシートの件で、担当者が混乱の中で間違ってお金を徴収するという大変な事態が起きた。その混乱を解消するため夜2日間くらいかけて各課長が区長さんや地区の代表者に1軒1軒説明しました。もう1つは住宅復興の中で、最初の話では、石垣や墓石が対象ではありませんでしたが、知事が来町し「中山間地の家は、石垣の上に建っており、石垣が崩れていて、かなり大きな問題だ。住宅復興のためには石垣は入れるべきだ」ということで石垣も対象になったというようなことがあります。

余談になりますが、「住宅復興対策により、自分の家が元の場所に建てることできる」と、お年寄りの家に伝えに言った時、本当に涙を流しながら感謝されたことは、今でも忘れられません。

今回、非常に良かったのは、知事が自ら現地を把握し、すぐ判断していただいたことです。すばやい対応で的確な支援策が出来たのではないかと考えています。

震災時における心構え、対応の仕方は、まず丁寧な情報を出し、重複を絶対にさせないということです。溝口はCATVの普及率が9割くらいだったので有線や広報以外にCATVをフルに利用し、情報を何回も繰り返し流していましたから非常に役に立ちました。

それから、とにかく県等からの電話問い合わせが多すぎます。色々なセクションからかかってきて、そ

も確実なものとし、自主防災組織の充実強化を検討する必要がある。

- ライフラインの確保。特に地下埋設方式の水道管及びガス管等の配管要図の整備が必要。
- 水道管修理の前に必ず残塩測定すること。(湧き水が水道からの確認の為) マニュアルを具体的なものとする。

●常時の防災体制(見直し等も含んで)の維持。情報の迅速の必要性。

- 神戸地震に際し、社員2名、1週間ではあつたが同業者への応援として淡路島へ行かせ体験させていたこと。又、その自信らしきものが判断、実行に生きていたと思う。

れだけで職員がくたびれてしまいます。とにかく電話より、まず職員を2、3人派遣して、その職員が県と町の間立ち正確な情報を持って県と連絡する。ですから、今回の知事が取った県の職員をすばやく派遣して県の職員を通じて情報伝達、情報収集と調整ということをさせたという方策により、対応の迅速化が図られたと思います。そして、災害時は曖昧な「検討します」とか「これを持ちかえります」という話をしないで「これは出来ません」「これはこれからします」[今、判断できませんが、何日以内に責任をもって連絡します]と的確にはっきり言わないといけないということと、情報は人の耳を伝わると必ず変わった情報になります。情報を徹底する意味でやはり繰り返し、繰り返しちゃんとした情報伝達を行うということです。

## 体験談6

根雨土木事務所 勤務 男性

### ●初動

工事の施工現場に向かう途中（国道482号、江府町）、公用車の中で地震に遭遇。①地震の規模・範囲、②家族の安否、③職場職員の安否、④施工現場の安否、⑤地元の方の安否、⑥これからどうなるのか、自分は何をすべきか等が瞬時に頭の中を巡りました。余震が続く中、職場へ状況を確認のため、携帯電話で連絡をするものの不通。途中、周囲の状況（道路のクラック・段差、落石、家屋の倒壊・屋根瓦のずれなど）により、「地震規模は、阪神・淡路大震災クラスの大規模なものではないか」と予想されました。興奮しながら、「管内の幹線道路は通行できるのか」「日野で孤立するのでは」などと考え、今後どのような体制をとり、自分に何ができるのか。自分一人で何ができるのかパッパッと頭を巡った。早く被災状況を知り、また自分の知り得た周辺の被災状況を職場へ連絡しないといけないと気だけが焦った。

### ●従事した防災対策

被災状況を知るため、自動車のAMラジオから情報を得た。実際に外の状況を確認したのはそれが最初であった。私が知りうる被災状況を職場へ連絡するため、近くの碎石採取現場事務所より有線電話を借り、状況確認・報告を行った。

私はその日はたまたま事務所長と一緒にその工事現場へ向かう途中であり、地震後は道路の落石・倒木を可能な限り撤去しつつ、対策本部を設置・統括するため先に所長は事務所へ帰所された。私は国道181号（江府町江尾地内、上記採石採取現場付近）で落石のため片側交互通行をするようドライバーへ促していた。その後、巨大な落石を近くの採石採取現場事務所の方に手伝っていただいて撤去、危険な状態ではあるが通行が可能となった。根雨土木事務所の維持管理作業車に乗り込み国道181号（溝口町宮原地内）の被災箇所へ向かい、交通規制の準備や被災状況写真撮影など復旧作業と被災状況報告のための作業を行った。

### ●従事した防災対策の評価・反省・感想

大切なポイントとして連絡体制の甘さが考えられる。防災無線がなく、（地震直後時点で）繋がらない携

- 学校では、火事や地震が起こったとき、無事避難させる訓練しか行ってこなかったことを反省した。
- 停電の為、校内放送が使えず、ハンドマイクで全校に指示した。ハンドマイクはすぐ取り出せる所に置くべきだ。
- 災害時に役に立つ技術等を自分が持っていないのが残念だった。
- 昼間の災害で、家に残っているのは高齢者がほとんど。地域での声掛けや協力が大切だと思った。
- 自衛隊が行なう災害派遣活動（内容）の見直し・再検討（災害の特性、地域性をふまえた支援内容とするべき）
- 災害の瞬間ではなく、その後をどう対処するかを念頭に置いたマニュアルが必要。災害時のルールを皆が共有する

携帯電話を頼りに状況確認・報告を考えた。また、初動の活動を通じて、自分の非力さを痛感した。再度職員一人一人が常に危機感を持ち、被災時に何をすべきか様々な状況を想定し、訓練・シミュレートし、可能な限り効率のよい対応復旧ができる体制づくりが必要である。

情報の伝達について、昼夜を問わず職員が交代制で集中管理していたが、情報の伝達がスムーズでなかった。組織としての意識を統一するための訓練やシミュレーションが必要と感じられた。

## 体験談 7

鳥取県企業局 勤務 男性

### ●地震発生時

机に向い勤務中の出来事で大きく建物全体が揺れ、停電。だんだん強く揺れだし、これはただことではないと感じた。花瓶が落ち、割れ、事務室内では大声が聞こえる。まともに歩けない、必死に机にしがみついた。大きな揺れがなおも続く。天井の隅を見つめると左右に30センチ位揺れている。建物も壊れそうだと思った。

しばらく揺れのおさまりを待ったが、止まりそうもない。電話・携帯電話が全面不通となった。工業用水道配水管が危ない、国道431号が配水管の破裂により道路流失の可能性も高い。そして車の事故は、どうすればいいのか。復旧の用途は、考えることさえできない。建設工事の現場は、どうなのか。発電所はどうなっているのか。様々な思いが頭を駆け巡った。

### ●初 動

1)職員の安全の確認、2)工業用水道施設点検、3)新幡郷発電所点検、4)日野川第一発電所点検

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

出動体制として、1)工業用水道一週間、休日等の出動体制の確立。2)通信体制一日頃から無線機の通信訓練。3)広報活動一広報活動の訓練。4)給水停止と現場状況一現場状況の早期確認。事故地点と給水停止バルブの位置把握訓練。5)道路遮断と現場確認一崖崩れ等被害続出のさなか危険な状態なのでヘリコプター等の利用検討など多くの反省点が得られた。

## 体験談 8

鳥取県立厚生病院 勤務 女性

### ●初 動

強い揺れが起きた時、すぐに阪神・淡路大震災を思い出した。テレビのスイッチを入れて、どの地域でどの位の地震が発生したのか知ることと、被害の状況、特に被害者の数と状況を知りたいと思った。当院

ことが必要（命令系統・安否確認の段取り等）

●ライフラインの大切さです。電話も水道も止まって、僅かに電気が通じていた事が大変助かった。ライフラインの大切さが本当に身にしみました。

●現地災害対策本部の立ち上げ、被害状況の収集と把握、報告等、日常の訓練の重要性を痛感した。

●山間地域の場合、交通規制等は特に経済活動に影響ないが、市街地での被害が大きかった場合、問題はあると思う。（迂回路等）

の災害マニュアルによるとM5強以上の時には自主的に病院へ行く、また、困難な場合は近くの診療所、避難所等で看護活動を行うこととなっている。倉吉はM4だったので、そんなに大きくないと安心していましたが、状況は刻々と変化し被害の実態は広がるばかりだった。もっと被害状況に関心を持ってできるだけ多くの情報を集める努力をしなければならなかった。また、看護者としていつでも行動がとれる様に身体的にも精神的にも準備をしておく事と、防災マニュアル・行動マニュアルを熟読しておくことが大切であったと反省している。起きてからではなく、日頃より定期的に勉強会や研修会を行い、防災の意識を高めあったり、いざと言う時の為に救援態勢を整えておくことが大切だと感じた。

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

地震発生から4日目の10月9日救援活動に参加した。その日は強い余震と雨が續いていた。早朝7時に病院を出発し、米子保健所でミーティング後、班毎に分かれて出発。溝口町に到着すると地元の保健婦・関係者の方が訪問リストと地図を準備しておられた。それを頼りに自宅と避難所訪問に分かれて行動した。しかし、土地勘がないのと交通の寸断や大雨の為、移動に時間がかかり訪問活動が思うように進まなかった。訪問すると状況を詳しく話されたり「心配で眠れない」「着衣のまま寝ている」など不安や疲労で戸惑いの表情が伺えた。聞いてあげることで少しでも心のケアができたと思う。看護者として自分にできることは何かを考えて行動すること、いたわりの心と皆様の役に立てればいいという思いで行動した。当院では地震発生後、防災マニュアルの見直しや発生を想定して勉強会を開いたり、研修会に参加して防災の意識が高まってきたと感じる。

## 体験談 9

### 米子市役所 勤務 女性

#### ● 初 動

地震発生時は、総務部長室で研修の打ち合わせ中であり、経験したことの無い揺れに思わず机にしがみついた。事務室に急いで帰ってみると、職員は机の下に潜り込み、書類はロッカーの中から飛び出し、足の踏み場の無い状況であったが、幸いロッカー等が倒れたり、ケガをした職員もなく、3階の窓から外を見ると、火災が発生している状況はなく、外見上は倒壊家屋も見当たらず安心した。

災害情報が飛び交う中で、早速、対策本部が設置されたため、業務車両の使用状況を確認のうえ、新規採用職員の職場復帰のための輸送方法を決定し、職場復帰させた。だれも経験したことの無い地震関連業務に従事したことは、新規採用職員にとって研修以上の貴重な体験であったと思う。その後、防災マニュアルに従って、輸送班の業務に従事した。現実には、輸送班業務の概要は分かっているが、実際にはどの様に行動したらよいか十分に分からず、イライラしながら災害情報を聞いていたように思う。

防災担当課は電話もバンク状態で、職員も手一杯の状況であったが、業務分担をすればとお互い思いながら、指示する方もされる方も、どの様に行動すれば良いか分からず、訓練だけでは対応できないことがしみじみと感じられた。

- 今回は人命等は大事に至らなかったが、やはり観光分野、特に集客拠点の施設では一番に客。そして、その避難誘導等が大切であり、いかにパニック状態を回避するかが大切であるかが分かった。
- 避難所の対応は早い方が良い。(不安で眠れない人が思ったより出てくる)

- 地震予知は難しいため、発生した時の事を考えて、備蓄等準備しておく必要がある。
- 知事のリーダーシップで迅速な対応がとれたこと(間近で見たこと)は勉強になった。
- 学校施設において、飲料水への対策ができていなかった。
- 地震などの自然災害は突然に起こるので日頃から防災の備

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

当初は、輸送班の業務で避難場所の毛布や弁当配りに従事した。余震があるたびに避難者が増え、毛布や弁当の配布に追われた。倒壊家屋等は少なかったため、常時避難場所に滞在するのではなく、昼間は自宅に帰り、夜間一人暮らしの方や高齢者の方が不安に思って避難される状況で、人数の把握に苦慮した。

住宅が被害にあった市民の方から、借入のために罹災証明が必要である旨の問い合わせが寄せられたため、震災4日目からは罹災証明業務に従事した。用紙も発行した経験がないため、全壊、半壊の基準も曖昧な状況で、最初は、阪神・淡路大震災の時に使用した用紙を基にワープロで作成し、カーボン紙を挟んで発行した。2、3日は50人程度の発行であったが、1週間目からは250人程度に増え、従事職員も15人を超える人数で対応した。

発行を依頼される市民の方も、取り敢えず罹災証明を発行してもらわなければと言う思いが強く、「なんで必要なの？」と逆に聞かれる状況で、聞かれる方も的確な返事ができずに手探り状況であった。一部損壊で認定された方も、隣近所が半壊または全壊の認定がされると、1日に40~50件の変更申請が相次いだ。特に、全、半壊の住宅には災害復興補助金の支給が決定されると、農家の方は住宅以外にも蔵、農業用倉庫、離れ等独立した小さな建物も多く、補助金の対象にならない物件の証明を一件づつ請求されたり、住宅の証明書を発行された後に、蔵等の付属建物の請求をされ、二度手間になったりで混乱することも多かった。

## 体験談10

西伯町役場町民課 勤務 女性

### ● 初 動

役場で接客中に震災に遭遇した。当日は町主催の会議があったため職員も少なく、人が足りないということで大きな焦りを感じた。まず、窓口のお客様を避難誘導したのが最初の仕事で、次に情報の収集をしたが、ケガの情報、家から出られなくなったなどのいろいろな被害情報が電話でかかってきた。その被害状況を大きな紙に書き、壁に貼るようにした。その他の被災状況を把握するために世帯名簿により、所在の確認、避難所に避難してこられた人の把握と集計を行った。

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

被災情報の把握をただけだが、いざ考えると何をすればよいのか迷いつつ、かかってくる電話に対応し、道路の被害状況や避難所の収容状況の把握に専念した。こうしておけばいいというものはないが、時と場合によっては役に立つものと立たないものがあると思う。確かに、このような被害時には「何と何をやる」というものがあればよいと思う。しかし、自分として何が一番重要なのかと言うと役場の職員が、このような緊急時においてどのような対応が必要なのか試されているような状況とも感じる。その時だけ乗り越えれば良いという問題ではなく、被災の終結までには長い日数を要するため場当たり的に処理するのではなく、大極的に対応し、長期戦となることを覚悟して取り掛からないと職員自体の身体が持たないという気持ちになった。みんなが被災しているという同じ条件なので、被災者の焦りにあまり同調して、自分も焦ってしまうとパニック状態になるので、しっかりとした「気持ち」が大切だということを痛切に感じた。

えをしておくことの重要性を感じた。危機管理マニュアルや対処の仕方などを議論をしたり、発生を想定して勉強会を行ったり、研修会に参加して防災の意識を高めておくことが大切だと感じた。

● 日頃から訓練等を通じて、災害時の行動を各自が考えておかなければいけない。

● 情報収集方法の確立が急務。

● 自治会等の住民組織が一番身近で頼りになるようであった。

● 震災に強い住宅について建築確認申請時に県での指導が必要。

● 人と人との関わり、人は人としてなければ生きていけない。人の暖かさ、人は人でないと救えない。



## 体験談11

溝口町役場総務課 勤務 男性

### ●初動

執務中に地震を受けた。担当が消防防災なので地震計により震度の確認をした。その後、役場の柱に亀裂が入っている状況なので、役場から避難することを指示。電話による問い合わせがあると思われたので、電話の対応要員を残し、町の防災計画と消防の防災無線を持って、安全であろうと思われる駐車場に対策本部を設置した。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

防災計画として、職員は何を最初にするのか決めていたのであるが、常時、災害を意識して勤務していたわけではなかったため、一時的に「自分は何をすればよいのか」ということへの戸惑いも見られた。しかし、当町は、職員用として行動マニュアルを作成していたので、ある程度迅速に対応できたと思う。地震発生後30分後には情報収集として町内に職員を派遣することができた。ただ、情報が入ってこない、何も対応できないということがあり、職員の目で状況を確認する必要性が大切であることから、公共施設の避難所、学校、保育所などの点検に力を入れた。

また、今回の対応の早さには、平成9年に震度5の地震があり、そのときの役場職員の対応が悪かったことの反省に基づき、翌年から災害対策に職員一同となって図上訓練などを行ったことが要因となっていると思う。絶えず、災害の危機管理について、各課、各部で訓練していたことが活かされたと感じている。

## 体験談12

西日本旅客鉄道株式会社 勤務 男性

### ●初動

職場で地震に遭遇した為、まず米子市内の自宅の心配と家族の事が気になり、携帯で電話するも通じないため不安を抱きながら会社の業務に従事しました。

連絡がとれないままに、対策本部が設置され、支社内全箇所のお客様の状況、列車の位置、異常の有無、被害箇所等の把握に努めました。状況が入りづらく、正確な被害状況等がなかなかつかめまいまま一夜が過ぎ家族の事も全く分かりませんでした。

まず、列車を停める事が安全第一であり、全区間の列車を止めました。震度が3以下の箇所もあったものの列車の安全を考えれば地震の強弱に関わらず停めた事は、良い判断だと思います。ただ情報収集に対する機関の弱さ、いわゆる電話等が全て通じない事に対しては何か他にないものかと考えます。今後も非常事態に対しては慌てず、焦らず適確に物事を捉え対処していく事とします。一言で言うと恐怖の一瞬でした。

- 現地に行って話を聞き、状況を確認することが第一であり、何が一番必要かを判断し、対応できる職員と体制を作ることが必要。そのためには、職員の意識改革を図ることが急務である。
- 地域コミュニティと行政と民間相互の協力体制を整えていく必要がある。

- 指導者が必要。
  - 職員全員の防災意識の持続。
  - 施設の耐震性の向上。
- 如何に形骸化でない実態に即した防災訓練が有効であったか、平時に於ける防災意識の高揚が大切であることを再確認した。普段できないことは異常時にもできない。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

担当していた業務の関係で対策本部に詰めて全体の状況把握に努めていた為、具体的な活動はできませんでした。被害関係全体のこと、列車、お客様、被害箇所の詳しい状況把握に努めました。

今回の様な大地震は初めての経験であり、全てに戸惑いがあり何から手をつけてよいのか分かりませんでした。一番が情報の問題で連絡が取れない不安は大変なものでした。又、余震が1,300回位あり、その都度列車の抑止。被災箇所の安全確認を行うにあたり、時間が大幅にかかり列車遅延がほとんど毎日あり、お客様に多大な迷惑をお掛けしました。全力を尽くして正常ダイヤに全社員一丸となって取り組みました。

気象台からの状況提供と協力があり、今回の地震に関しては情報が直ちに入り助かりましたが、道路情報等が正確に入らず四苦八苦致しました。今後も安全正確な輸送を提供する為にも、全社員一丸となって努力します。

## 体験談13

中国電力株式会社倉吉電力所 勤務 男性

### ●初 動

電力設備の維持を担当している者として、「設備被害の程度がどのようなものか確認しなくては」という思いで情報を集めました。発電所、変電所で停電している箇所はないか、事業所に設置している給電情報伝送装置で確認したところ、旭発電所、黒坂発電所、吉谷変電所の1バンクが停電し、お客様へ電気を供給していない事が分かりました。直ちに、復旧体制を敷く必要があると感じ電力所本部への情報連絡と関係協力会社への応援要請を行い、自所の担当者をそれぞれ停電している発変電所へ出勤させました。その後、日野変電所で変圧器の1台がブッシングが破損し漏油しているという情報が入って来ました。漏油溜りに溜まっていた漏油処理を専門の請負業者へ依頼しました。山陰地方の業者さんでは対応しきれず広島 of 業者さんへも依頼しました。発動については、日頃復旧訓練を実施しており、その経験が活かされ割合上手くいったと感じています。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

停電している箇所の故障表示が、設備では主となる変圧器であった為、現地確認をしてから送電しようと考えていたが、予定した時刻になっても到着の連絡がなく（実際は至る所で通行止めに遭っていた）停電が長引く為、危険を承知で遠方制御で送電することを要請しました。その後、現地へ到着した担当者から具体的な被害状況を聞き、復旧に入って行きました。復旧資材の調達には電力所本部の支援班が窓口となって調達してくれました。また、復旧についても電力所本部の復旧班と協調を取りながら（倉吉、鳥取地区からの応援等）復旧して行きました。中国電力では、H3年の台風19号による塩害（瀬戸内地方に大被害をもたらした）、H7年の阪神・淡路大震災を教訓に非常時の訓練、広報等を含めた全社的な防災体制が確立されており、比較的スムーズに復旧できた。問題点としては、道路状況の早期の情報収集、外部との電話連絡の改善が挙げられる。

- 会社設備のうち、溶液や粉体を貯蔵する設備が地震に弱いということが分かった。
- 災害危険箇所の把握と道路が寸断された際の迂回路の確認、市街地で被害が拡大した場合を想定しての防災訓練等が今後も必要であると痛感した。
- 日頃からの防災訓練・防災意識の高揚を図ること。地域や

職場での共通理解を常日頃から高めておくこと。迅速で正確な情報を提供すること。ボランティアの組織化・ネットワーク化。

- 災害の対応には、まず情報の混乱が考えられるので、各機関が情報を共有することが必要と考える。
- 県及び市町村主導の訓練の重要性。

## 体験談14

米子瓦斯株式会社 勤務 男性

### ●初動

地震発生時には、先ず、お客様の安全確保が最優先です。「ガスの供給を継続するか否か」を考えました。初動は被害状況の早期把握です。地震発生直後に、在勤社員の非常招集と外勤社員の会社業務用無線による帰社（途中の被害状況把握）を指示し、対策本部を確立しました。ガス製造所の異常確認や当社設置の地震計の記録ならびにガス送出記録による被害の推定を行う一方、電話等の受付体制を確保し、直ちに供給エリア内の被害調査班を編成・出勤し、被害状況の情報収集にあたりました。広報は報道機関・市役所等を通じ「ガス使用の注意」についての広報を依頼し、タイムリーな報道をお願いしました。さらに監督官庁ならびに日本ガス協会への連絡体制を確保（緊急時優先電話）し、初動については、電話の一時不通があったものの初期の対応は順調に行えたと思います。連絡手段として、業務用無線の有効性をあらためて痛感しました。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

災害対策本部の下に被害箇所状況分析を行い、復旧計画を立て監督官庁ならびに日本ガス協会と緊密な連絡をとりつつ、緊急対応に万全を期して復旧活動にあたりました。特にマイコンガスメーターの復帰にあたりましては、お客様への電話対応ならびに広報により復帰の大半が処置できました。ガス漏洩につきましては、ガス供給エリアの全域調査を行い8日の未明には安全の確認を完了しました。お客様の設備点検を行い安全なガス使用にも配慮しました。そして10月10日災害救助法の適用に伴い、災害特別措置の申請、即日認可を受け翌日には災害特別措置を実施しました。今回の震災にあたり、応援者を含め延べ824人（10月15日災害対策本部解散）を動員し処理にあたりましたが、阪神・淡路大震災の教訓が大いに活かされたと思っています。今後も実態に即した訓練の継続の大切さを痛感しています。反省点として、緊急調達物資及び調達先のリストアップがあげられます。

## 体験談15

日本海テレビジョン放送株式会社米子支社 勤務 男性

### ●初動

地震発生時、車で皆生通りを西に向かって進行中、ハンドルをとられ蛇行運転となる。「タイヤパンクかなあ〜」と思い道路左側へ車を寄せ前方を見ると電柱や電線が大きく揺れていた。米子支社へ帰り、地震だと再確認。報道機関なので非常時の体制等はマニュアル化してあるのですが、頭の中には全く浮かばず、極く自然にやれる事とやらなければならない事をこなして行ったと思います。まず支社員の所在と招集。かなりの揺れだったと思い映像を入手する事。支社の建物の損傷箇所。この3点を行った時点で本社より具体的な震源地、どの方面の被害が大きいか等の情報があり大枠をつかむ事ができた。これ以降が大変で

- 今回の地震で初めて存在が明らかとなった活断層があるなど、地震に関する基本的情報が極めて貧弱なことが分かった。もっと、こうした研究に注力すべき。
- ボランティアの方の存在のありがたみが良く分かり、私も今後ボランティア活動したいと思います。
- 行政、消防等の公的機関に限られた人的体制で、十分な対

応をする事は無理があると思う。住民が自分たちの地域に責任を持ち、相互扶助と自主・自立の精神を再確する必要があるのではないかと。

- このような震災でも早急に対策本部が設置され、速やかに行動ができた。また、昼一時頃のことなので夜間等であれば、対応も遅れてくると思われる。

マニュアル化してある非常体制は吹っ飛び夕方近くには、日本テレビ系列各社の取材応援も到着。今後の連絡網、体制等について冷静に話し合えたのは夜10時以降であった。今後の教訓としてはマニュアルの見直しは勿論であるがこれに基づくシミュレーションをくり返し実施する事。

## 体験談16

社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会 勤務 男性

### ●初 動

震災直後は、米子市内にいたため情報も入らず、携帯電話も使用不能、JRも不通の状態であったが、幸い同じ方面の車に便乗して帰ることができた。そして、震災当日には、県社協対策本部を設置し、西部地区の市町村社協に被害状況、独居老人等の福祉対象者への対応、ボランティアの必要性について電話照会。その後、米子市に災害ボランティアセンター現場本部の設置、被害の大きい日野町、西伯町に災害ボランティアセンターを設置し、県社協職員10名を派遣するとともにコーディネート支援を開始した。

### ●従事した防災対策・評価・反省・感想

地震後の10日間は、派遣要請とボランティア活動者がともに多く、「活動内容もガレキ撤去」「家屋の応急修繕」「土嚢作り」「ブルーシート張り」など単純に人数と力を要するものが大半であった。また、水道に被害を受けた住民を入浴サービスのために移送なども行った。しかし、罹災者でボランティアによる支援を必要とする大多数が高齢者であり、他人に援助を受けることに拒否的な感情を持つ方が多く、自発的に要請されないためボランティアは多数いても活動する場面が限定されていた。市町村レベルでもボランティアによる援助活動についての理解がなく、援助の対象・範囲を独居老人等に限定して捉えていた人が多かった。市町村行政として、災害ボランティアセンターの窓口となり、責任ある対応ができる担当者を決めておくことも必要と考えられる。

## 体験談17

西伯町商工会 勤務 男性

### ●初 動

被害状況確認に管内を巡回したが、被害が大きく件数、金額とも把握困難であった。震災等の被害に伴う損害税務対策と復興資金の相談を受付ける体制づくりに着手し、税理士による雑損控除の集団指導手配。復旧支援のために写真と被害の記録を呼びかける案内をFAXと共に全避難所に配布。

以降、連日深夜まで連絡と案内で避難所回り等の対処を行った。また、「災害対策本部」を開設し、復旧相談として、運転資金、生産設備復旧資金・高齢者の住宅復旧資金借入方法、悪質業者の対策、保健申請の罹災証明、災害損害の税務等の相談を行った。

- 県の防災危機管理体制は直ちに立ち上げられたが、当支局の体制の立ち上げが少し遅れた。県の防災危機管理室で把握している情報がインターネットで入手できるシステムを構築できないか。
- 各町村は、県の防災計画と一貫性をもって細部事象まで想定した実行性、具体性のある防災計画を策定する必要がある

と感じられる。

- 災害はいつ起こるか分からないので、備蓄物資の充実と体制作りが必要だと痛切に感じた。
- 災害対策本部の輸送班としては、まず車両の確保が前提となることを再認識した。

### ● 従事した防災対策・評価・反省・感想

損害記録と税部対策資料の作成と配布、災害による雑損控除申告手続きの集団指導を手配、税務相談案内配布。企業・避難所巡回など災害対策支援の金融関係、被災確認受付対策などを実施。

「人命は3日以内」といわれるが、事業被害の関係も初動の1～2週間に集中的に人員を投入できなければ被害の記録、相談受付、被害金額や件数の把握と対処処理体制の構築を同時に進行することは困難である。情報収集・報告体制は町村経由に一本化が望ましい。復旧支援も町村が中心となる為、当初からの情報の蓄積が、復旧対策への活用が期待できる。

- 総合的な指揮本部の必要性を感じた。現場は自分の目で見ながら行動すること。
- 日頃からの行政、社協、ボランティア、地域住民、防災関係機関との結びつきが重要だと思う。やはり連携こそが災害時への対応に大きく影響してくると思う。
- 通信回線、生協では事業所間を社内ラン（ノートメール）

- 専用回線で運用電話が通じなくても、社内ランが活用できたため情報がうまくつながった。また、車に無線を積んでおり、各配送車から出先の情報が入手できた。
- 今回の地震により、職場の「災害対応マニュアル」をより対応しやすいものへの見直しを図ることができた。